資料論文

愛媛県南予地方の和文化教育
―文楽と学校教育の関わりを事例として―

岡崎　均

Education on traditional Japanese culture in the Nanyo region of Ehime Prefecture
―The relationship between Bunraku and school education―

Hitoshi Okazaki

キーワード：和文化教育　伝統文化　文楽　学校教育

はじめに

全国には様々な伝統芸能が継承されており，地域の無病息災を願い始まった行事や祭礼など土着のものや，他の地域から伝えられ形を変えながらも継承されてきたものなど様々である。これらの伝統芸能の多くは地域の子供たちの参加を欠かすことができず，地域らしさという価値を持つ伝統芸能の継承として，地域社会と学校が深く相互に連携し学校教育に取り込まれてきた。

本稿の目的は，地域の伝統芸能と学校教育の関わりについて，愛媛県南予地方に伝わる文楽を取り上げ，その発祥と継承と文楽が学校教育にどのように取り込まれてきたかについて考察することである。実は，南予地方は少子高齢化と過疎の進展という，日本のどこの地方も抱える重大な問題に直面し，併せて学校の統廃合も進んだ地域である。このことを踏まえ，地域のアイデンティティーともいえる伝統芸能について，学校教育との連携の中でどのように地域で継承していくべきか，また，逆に地域の伝統文化を取り入れるならば，学校教育にどのように取り込めばよいのか，どんな効果があるのかという点を視野に含み，今後の地域における和文化教育の方向を検討する。

1　文楽の地域への伝承

和食がユネスコの世界無形文化遺産に登録されたことは記憶に新しいが，文楽は，昭和30年には国の重要無形文化財に指定されており，日本がユネスコの無形文化遺産保護条約

大阪体育大学教育学部
〒590-0496 大阪府泉南郡熊取町朝代台1-1

を平成18年に締結後，能楽，歌舞伎と共に世界無形文化遺産に最初に登録された日本の伝統芸能である。

人形浄瑠璃は，文禄・慶長年間（1592～1615年）に京都で人形操りと浄瑠璃，三味線が結びついて誕生したとされている。ただし，淡路地方では鎌倉時代から神事を生業とする人により人形操りが行われるようになった歴史を背景に，18世紀始めには，徳島藩蜂須賀家の庇護もあり淡路の文楽は隆盛を誇った。当時40の座元と1000人以上の人形役者がいたとされ，日本全国を巡業している。大阪で文楽の語源になる文楽座を開き，その後，人形浄瑠璃が文楽と呼ばれる語源となった植村文楽軒も淡路出身である。

これらの淡路の座元が全国へ巡業に出かけ，各地に伝承される文楽の発祥に繋がっていく。淡路人形協会が2014年に編集した「史料に見る淡路人形浄瑠璃」によれば，現在，淡路流の流れをくむ文楽は全国で40の座が活動中であり，とりわけ5座以上が活動しさかんだと考えられるのが徳島，岐阜，愛媛の3県である。

愛媛県では現在，伊予源之丞，朝日文楽，俵津文楽，大谷文楽，鬼北文楽の5つの座が活動中だが，この5座の内、伊予源之丞（松山）を除く4つの座が，愛媛県の南予地方に集まっている。南予地方は愛媛県の西南に位置し，リアス式海岸に囲まれた山地の多い地域で，温暖な気候のもと温厚で篤実な人間性を育んでいる。柑橘類の生産や漁業が産業の中心だが，近年は過疎化と少子高齢化の問題を抱えており，4市4町のどの自治体も人口が減少している状況にある。そのため，児童数も激減し山間や漁村にある小規模の小中学校を中心に学校の統廃合が進んだ地域である。

したがって，この地域が抱える問題を踏まえ，地域に伝承されている文楽の活動と学校教育との関連について考えることは，地域に伝承する文化が学校教育とどのように連携していくべきか，その方向性の手がかりを得ることができるだろう。

2　鬼北（きほく）文楽と泉小学校の取組

鬼北町は，高知県と県境を接する人口約10000人の山間の小さな町で，鬼北文楽発祥の地である泉地区は，四万十川の支流に沿った小さな集落である。

鬼北文楽は一度途絶えた後に，地域の人々の尽力により復興を果たしている。その発祥は1935（昭和10）年と4つの座の中では最も新しいが，人形頭や衣装等の道具は実に数奇な運命をたどっている。

(1) 鬼北文楽の発祥と継承

1897（明治30）年，淡路島から泉村（現在の愛媛県鬼北町泉地区）に巡業に来た上村一之丞の一座は，不運にも大雪のため芝居小屋

が潰れてしまい，多くの人形を掘り出したものの興行が打てないままであった。次の巡業先でも話の行き違いから興行を打つことができず路銀が尽きてしまう。とうとう一座は，現地の富農に人形一式を売り払い解散の憂き目となってしまい，淡路に帰る者や近隣に住み着く者と座員も四散してしまう。

およそ40年後の1935（昭和10）年になり，近隣の農家の蔵に眠る人形一式のことを知った泉地区の農家が1200円という大金を投じ買い取り，泉文楽として発足する。これが鬼北文楽の発祥である。1945（昭和20）年頃の当時の新聞記事によれば，会員が100名を超え，農閑期や近隣の村の祭礼時に巡回公演を行っている。しかし，次第に義太夫に耳を傾ける者もいなくなり，1953（昭和28）年を最後に公演は途絶し，1959（昭和34）年に愛媛県の有形文化財の指定を受けるものの，人形道具一式は農家の蔵に眠ることになる。そして、1969（昭和44）年に農家の蔵が火災となり保管していた39体の人形が損傷を受け，指導者がいないこともあり鬼北文楽は消滅してしまう。

ところが，10年後の1980（昭和55）年，県文化財である人形の価値を訴える地元の小学校長の尽力で，人形の頭が修理可能であることが分かる。そして，1982（昭和57）年には100万円の費用を県と町，地元有志が負担し，10体の人形を修復。1983（昭和58）年3月には17体の人形を150万円かけて修復する

写真１　公民館に展示されている修復された頭と損傷した頭

（写真1）。同年，鬼北文楽保存会が結成され鬼北町教育委員会が中心となって勉強会を開催し，近隣の三瓶（みかめ）町朝日文楽（後述）への研修などを通して，復活公演を行うことができた。

現在は，会員が14名で練習を行っているが，人形遣いが5名になっており，演じる外題も限られてきている。年間の活動は，鬼北町文化祭と地元の中学校文化祭での公演，泉地区の芸能祭での公演と泉小学校での指導が主となっている。しかし，会員が高齢化し後継者が不足しているため，存続の危機にある（写真2）。

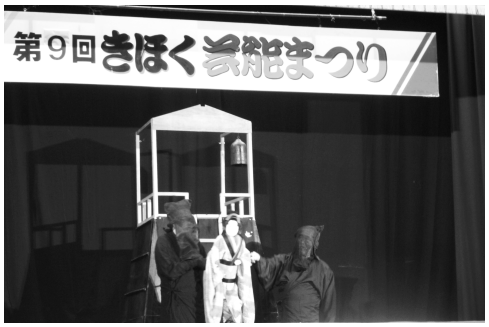

写真２　鬼北文楽の公演（H26）

写真３　鬼北町泉地区と泉小学校

(2) 鬼北文楽と泉小学校文楽クラブ

鬼北文楽の発祥の地である泉地区にある小学校が鬼北町立泉小学校である。1974（昭和49）年に近隣の2つの小学校が統合して開校した当時は208名の児童数であったが，過疎化と少子高齢化により，児童数は46名（2015年現在）となり，小規模校の特長を生かした地域に根ざしたぬくもりのある教育を展開している学校である(写真3)。

鬼北文楽が泉小学校に取り込まれたのは，16年前の1999（平成11年）1月のことである。この年の泉小学校の学芸会で初めて鬼北文楽保存会により文楽が上演された。同年6月に3年生児童が人形に触らせてもらうなど，学校での文楽の学習が始まる。平成12年6月に5年生が，当時始まった総合的な学習の時間において文楽の体験学習を行う。11月には文楽保存会から手づくりの人形の寄贈を受け児童が練習を開始し，翌2月に発表する。このことをきっかけに，平成13年度から泉小文楽クラブとして，自分たちの故郷の伝統文化を知り豊かな心を育てたいという目的から，クラブ活動の一環として学校教育の中に取り込まれることになった。

クラブ活動に取り込まれることは，当時のカリキュラム編成からは妥当な判断であった。当時，学校現場に地域の伝統行事を取り込む意識は，始まったばかりの総合的な学習の時間においては十分に醸成されておらず，学年の範囲を越えて体験活動ができるクラブ活動としての位置付けは，学校の教育課程編成には容易であったと考えられる。

同時に，泉地区の鬼北文楽保存会としても，手づくりの人形を寄贈したほどであるから，新たに地元の学校のたちに，地域の誇りであ

る鬼北文楽を教えるという意欲が非常に高かったと考えられ，学校教育への導入も一気に進展したと考えられる。その後，地域による手づくりの舞台も整えられ，文楽会の人形を使わせていただくなど，連携と協力を深めながら，現在は地域と一体になった学芸会での発表，老人ホームへの訪問公演などが活動の中心となっている（写真4）。

写真４　練習風景と老人ホームの慰問公演（H27）

2015（平成27）年度は8名の児童が人形遣いと浄瑠璃を担当し，鬼北文楽保存会から3名の指導者が来校し月に2回の練習を行っている。演じる外題は，定番の「傾城（けいせい）阿波の鳴門　順礼歌の段」である。

泉小学校が2013（平成25）年に南予地区で開催された社会教育行政担当者研修会において発表した資料によれば，「活動するにつれて人形を操る面白さ，伝統芸能に触れる楽しさを知り，一生懸命に練習した。文楽クラブに所属してよかった。」（卒業生），「江戸時代から受け継がれているのはすごい。このことを忘れずに練習に頑張りたい。」（6年生）という児童の感想と，「古典であるので内容の理解が児童に難しい」ことが指導者側の課題として報告されている。

3　大谷文楽と大谷小学校の取組

愛媛県大洲市は人口約44000人で，平成17年に近隣の大洲市，長浜町，肱川町，河辺村が合併して誕生している。旧肱川町は人口2300名の小さな町であり，肱川の河岸段丘の山間に位置する大谷地区は，170世帯400名，高齢化率50％の小さな集落である（写真5）。

写真５　大洲市肱川町大谷地区

その大谷地区に伝わる大谷文楽は，南予地方に残る4つの座の中では淡路流の文楽を正

統的に継承している座である。

(1) 大谷文楽の発祥と継承

浦賀に停泊するペリーの対策に幕府が追われていた1853（嘉永6）年6月に12代将軍徳川家慶が病のため急逝する。その喪により幕府は各藩に3カ年の歌舞音曲の停止を命じる。当時，大洲藩領の大谷で巡業をしていたのが淡路の吉田伝次郎一座であったが，やむなく座員は淡路に帰郷する。しかし，大谷の庄屋三瀬家の世話で5名の者が大谷に残り，地区の若者に人形を操ることを伝授することになった。その後，1856（安政3）年には，徳島から人形や衣装を購入するなど，座の充実を図っていくことになるが，これが大谷文楽の発祥とされる。

背景には，平地が殆ど無い山間地であっても，木材や楮，和蝋燭などの産地としての地域の豊かさがあり，娯楽の少ない地域にあって，人形浄瑠璃の巡業は貴重な娯楽として受け入れられる素地があったことが要因として考えられる。

その後，1907（明治40）年から1945（昭和20）年にかけて，幾つかの座を買収しながら成長し，様々な機会に招かれ喜多郡内で公演を行っている。1955（昭和30）年頃までは，野掛け小屋で一日を通して人形芝居を楽しんだと文楽保存会の方が述べていることからも，人形浄瑠璃は大谷地区の娯楽として定着していた。1964（昭和39）年には愛媛県の無形文化財に指定され，1974（昭和49）年より毎年，町内で公演を行っている。1983（昭和58）年には，大谷地区に郷土文化保存伝習館が完成し，肱川地区小中学校での巡回公演や愛媛県内の合同公演にも参加している。現在は，座員が14名だが，高齢化による後継者不足が課題であり，継承が危ぶまれている状況にある（写真6）。

写真６　郷土文化保存伝習館と大谷文楽の公演

この大谷文楽の大きな特長は，当時，他の地域に先駆けて行った地元の大谷小学校との連携であった。

(2) 大谷文楽と大谷小学校「大谷子供文楽クラブ」での取組

大谷地区の大谷小学校が「大谷子供文楽クラブ」を発足させ，地域と連携して大切な宝を是非体験させたいと，学校教育に文楽を取り入れたのは1989（平成元）年であった。この当時，体験的活動や地域の伝統芸能を学校教育に取り込むという発想自体が珍しく，大谷小学校がへき地校であることとも相まって，大きな注目を集めた。

1992（平成4）年には，義太夫も子供たちが始めるなど活動が活発になり，全国へき地研究会や県の人権集会でのアトラクションに参加し，テレビでも数多く紹介された。また，1992（平成4）年に発足した三瓶町のこども朝日文楽クラブとの交流会も4年間にわたって行っている。さらに2002（平成14）年には1年生の殺陣を追加し，翌年には，ギターを三味線に見立て伴奏も開始するなど，小規模校の良さを生かした工夫を加えながら発展させている。

練習は毎週1回，大谷文楽保存会の方の指導で，昼休みも活用しながら行っていた。定期的な活動は，地域の老人ホームの訪問と地域行事と一体になった学芸会での発表であり，地域住民は大谷小学校の子供たちが演じる文楽を楽しみにしていた（写真7）。

写真７　大谷子供文楽クラブの老人ホームでの公演

写真８　人形の返納式と閉校になった大谷小学校

(3) 大谷小学校閉校と大谷文楽の継承

地域と学校が一体になった先進的な取組である大谷子供文楽も，2014（平成26）年3月の大谷小学校の閉校で終わりを迎える。閉校時の児童数は18名であった。

学校の統合に当たっては，学校経営がスムーズに移行するように，教育目標やカリキュラム編成，学校行事など経営の方針が事前に協議されるが，その際に課題となるのが，各学

校の地域と関連した行事をどのように統合校に取り込むかという点である。

大谷小学校の統合に当たっても，近隣の5つの小学校が統合し新たな小学校としてスタートするため，統合前の各学校の地域に根ざした教育の継承と新しい学校の在り方が課題となった。地域と連携した諸活動については，全てを受け入れることはできないことから，大谷文楽についても地域に戻さざるを得なかった。

閉校を控えた2013（平成25）年12月の学芸会で最後の子供大谷文楽の発表が行われ，大谷文楽保存会へ人形の返納式を行っている。そして閉校直前の3月には親子で文楽体験学習会を行い，次年度から定期的に学習会を開催することを申し合わせた。しかし，残念なことに大谷小学校の閉校後，学習会は開催されていない。

25年にわたって地域の伝統芸能に取り組んできた学校の果たした役割は大きく，子供たちの学芸会での発表を地域住民は楽しみにしていたし，文楽保存会も地域の子供たちへの指導が活性化に繋がっていた。

将来，高齢化と後継者不足もあり，160年継承されてきた大谷文楽の存続が懸念される。今後，後継者の育成と地域の健全育成を目的とした子供文楽保存会などの社会教育の面からの体制づくりが必要と考えられる。

4　朝日文楽とこども朝日文楽，三瓶（みかめ）高校文楽部の取組

愛媛県西予市は人口約40000人で，2004（平成16）年に近隣の5つの町が合併してできた市である。愛媛県南予地方の市町がどこもそうであるように，合併から10年で約6000人が減少しており過疎と高齢化が大きな課題となっている。西予市には5町が合併したことで，旧町の伝統芸能や祭礼などそれぞれに特長を残しているが，文楽について特筆すべきは，西予市にある朝日文楽と俵津文楽の2つの座が，継承も含めて活発に活動しているという点である。

そのひとつである三瓶町の朝日文楽は，リアス式海岸の入り江に囲まれた人口約7000人の小さな町で継承されている（写真9）。

写真９　西予市三瓶町朝立地区

(1) 朝日文楽の発祥と継承

1879（明治12）年頃，地元の手先の器用な若者が手づくりの人形で一口浄瑠璃を語りはじめ，地元の若者や子供が集まるようになった。そして，1883（明治16）年に，初めて掛

小屋を作り人形芝居が公開されたのが始まりである。1889（明治22）年から1907（明治40）年にかけて近隣の座を購入し，人形頭が200，衣装が60，八段返しまで揃うなど四国の人形座でも五指に入るほど豪華になり朝日座と命名される。そして，1911（明治44）年には地元に劇場が完成し，大正末期には，旧正月公演で5日間の公演を行い満員であったという記録が残っている。娯楽の少ない地域にあって，人形芝居が当時の人々の楽しみであったことが伺える。

その後，戦時中の衰退を経て戦後，大阪文楽の指導を受け朝日文楽として出発し，1959（昭和34）年には愛媛県指定文化財（現在は愛媛県有形無形民俗文化財），1961（昭和36）年には朝日文楽保存会が結成され，1977（昭和52）年には地域の寄付も加えて朝日文楽会館が完成する。1996（平成8）年にはハワイ公演を行い三番叟を披露するなど，非常に充実した活動を展開している。

2000（平成12）年には，県内の5つの座が合同で資金を出し合い県の助成を受け淡路人形座の指導で太夫と三味線の養成に取り組んでいる。実は文楽の人形遣い，太夫，三味線の三業のうち，三味線は人形の動きと太夫の語りに併せて弾くことが必要なため最も養成が困難である。研修の成果もあがり平成15年には，太夫，三味線を加え朝日文楽は，県内で初めて自主興業ができるまでに成長した。

その後も毎年の公演活動は充実し，2015（平成27）年には老朽化した朝日文楽会館にかわり，総工費4億をかけた新しい朝日文楽会館が完成している。

現在，座員は25名でそのうち，太夫が4名，三味線が3名となっている。20歳代から80歳代まで幅広い年齢で構成され，練習も活気に溢れている。主な活動は，町内の文化祭や愛媛県の文楽合同公演となっている。そして，新しい朝日文楽会館を起点として記念公演や県の合同公演の実施，定期公演の計画など，今後の活性化が期待されている（写真10）。

写真10　新築された朝日文楽会館と練習風景

朝日文楽の特長は，大谷文楽や鬼北文楽とは違い，地域の伝統芸能を継承する担い手が育っているという点である。これは，朝日文

楽を支える人たちの地域のつながりが密であり，社会教育面からも行政がバックアップしているという要因に加え，学校教育との連携も大きな要因となっている。

(2) 朝日文楽と三瓶高校文楽部，こども朝日文楽クラブの取組

地元の三瓶高校に文楽部ができたのは1964（昭和39）年であった。当時の校長が「古き文化を知らずして新しい文化の創造はあり得ない。先人の残した古典の良さを味わわせたい」との観点から，地域の誇れる伝統芸能である朝日文楽を高校生に学ばせたいと朝日文楽会に指導の要請があり，保存会も後継者育成の観点から賛同し文楽部が創部された。当時としては，地域の伝統芸能を文化部の活動に取り入れる試みは非常に先進的であり，創部当初から新聞社やテレビ取材を受けている。地区の敬老会や町の文化祭，県校高校文化祭での公演，県の文楽合同公演や全国人形芝居サミットへの参加を通して活動を充実させ，毎年，高校文化連盟文化功労賞を受賞している。現在は部員の減少という課題を抱えつつ，町の文化祭や鑑賞会，県文楽の合同公演への参加を継続し創部以来50年の歴史を刻んでいる。

朝日文楽や三瓶高校文楽部の活動を背景に，こども朝日文楽クラブができたのは1992（平成4）年である。当時，学校週5日制の実施に伴い休日となる土曜日の受け皿が議論されていた。学校と教育委員会関係者で協議した結果，児童生徒の健全育成と生涯学習の観点から，地域の伝統芸能である朝日文楽の体験的学習を行うことになり，地域少年少女サークル活動推進事業として社会教育が主体となりクラブが立ち上がった。発足当時から，老人ホームでの公演や先に文楽を学校で取り組んでいた大谷小学校との交流，文楽鑑賞などの活動を行ってきた。現在は，町の文化祭，老人ホーム，町の文楽鑑賞会での公演が主な活動となっており，2015（平成27）年度は小学生3名中学生4名の7名で活動している（写真11）。

写真11　こども朝日文楽クラブと三瓶高校文楽部の公演（H27）

(3) 朝日文楽継承のサイクル

朝日文楽の特長は，三業が確立し独自で公演できる点に加えて，座員25名のうち20代の若手が8名と多く，地域で継承のサイクルができているという点にある。実は，文楽に取り組む若手の内，半数はこども朝日文楽クラブ，三瓶高校文楽部での経験者なのである。1992（平成4）年にクラブが発足して，小学校から高校まで文楽に取り組み親しんできた若者が古里に戻ったとき，経験してきた文楽を継承しようとするのは，自然の流れであった。小学校から経験してきたことで，普通は敷居が高いと思われる文楽だが，自然と親しむことができたと座員は話している。20年以上にわたって地域を挙げて継続してきた取組が結実している（写真12）。

写真12　小中学校，高校と文楽経験した若者による公演（H26）

5　俵津文楽と明浜中学校の取組

愛媛県西予市明浜町は，リアス式海岸に面した農業と漁業が主な産業の人口約3500名の主に4つの地区からなる小さな町である。そのうち俵津地区は1200名の集落で，ここに伝わる俵津文楽は愛媛県内でその発祥が最も古い（写真13）。

写真13　西予市明浜町俵津地区と俵津文楽会館

(1) 俵津文楽

俵津文楽は1852（嘉永5）年，当時の村の船持，伊井庄吾が若者の情操教育のため大阪より人形数個を買い入れ，浄瑠璃による人形芝居を習得させたのが始まりである。その後，近隣の八幡浜の座や淡路の人形座を購入し，明治から大正にかけて島嶼部を2～3週間巡業したという記録も残されている。戦後は1948（昭和23）年から大阪文楽から師匠を招き後継者育成のため人形遣いの練習を始め，続いて昭和27年には義太夫の練習が始まる。

1959（昭和34）年には県の有形文化財指定，1964（昭和39）年には無形文化財の指定を受ける。

しかし，1971（昭和46）年頃には後継者不足で単独の興行が困難になってしまい，存続が危ぶまれる。このことを憂いに思った当時の公民館主事が「公民館活動の一環として地域の伝統芸能の伝承者を集めたい」と呼びかけ，1977（昭和52）年に地区の婦人会20名が俵津文楽に参加する。続いて地元の青年団OBも参加し練習を重ね，5月には公演を行っている。女性の参加は当時としては珍しく，新聞にも「俵津文楽　主婦の手でよみがえる」と大きく取り上げられている。

1987（昭和62）年には念願であった俵津文楽会館が完成し，地域の桜祭りでの毎年の公演，全国国民文化祭への参加（平成5年），全国人形芝居サミットへの参加など活発な公演活動を行っている。長年の懸案であった三味線の養成も叶い，2011（平成23）年から自主興業ができるようになった。

現在，保有している人形頭は101点，動物頭17点，衣装や道具など数多い。座員は30名でそのうち太夫が5名，三味線が3名。座員に若手も多く練習も活気がある。現在の活動は，地域の春祭り，県文楽合同公演への参加，大阪の義太夫クラブとの合同公演を中心に，研修会や記念行事，催事など要請があれば公演を行っている（写真14）。

写真14　俵津文楽の公演（H26）

(2) 俵津文楽と明浜中学校の取組

西予市明浜町の唯一の中学校が明浜中学校である。明浜中学校は，2003（平成15）年に町内の2つの中学校が統合してスタートした，生徒数63名（平成27年度）の小規模の中学校である。現在，明浜中学校では，総合的な学習の時間に地域の伝統芸能である俵津文楽の学習を行っており，その成果は10月の文化祭で発表される。

明浜中学校で俵津文楽の学習が行われるようになったのは，学校統合と総合的な学習が要因となっている。統合前には，文化祭やPTA研修会などでの公演はあったものの，当時においては，学校教育の中で地域の伝承芸能を体験的に学ぶという発想そのものが，学校，地域双方になかった。しかし，2つの中学校の統合を契機に，俵津地区の生徒が俵津文楽の練習に参加し，その成果を文化祭で発表したことをきっかけに，不定期ではあったが，総合的な学習の時間を中心に練習を行い，

諸行事のアトラクションや文化祭で発表を行った。背景には，統合した中学校にとって地域と連携した新しい教育内容を必要としていたという点が挙げられる。平成22年には音楽の授業でも義太夫や三味線を取り入れるなど充実が図られる（写真15）。そして，平成23年，愛媛県の学校力アップ実践研究事業（伝統文化）の研究指定を受け，俵津文楽が正式に学校カリキュラムに位置付けられることとなった。

写真15　音楽での義太夫と三味線の授業（H23）

(3) 総合的な学習の時間における俵津文楽の学習

明浜中学校では，研究指定を受け各教科において伝統文化の内容を再検討し年間指導計画に位置付けると共に，総合的な学習の時間において地域学習を大きな柱として定め，3年生が俵津文楽に取り組んでいる。約20時間をかけ，俵津文楽の指導者の指導を受けながら，「傾城阿波の鳴門　順礼歌の段」の練習に取り組み発表している。生徒は，「今までは文楽について余り興味がありませんでしたが，実際に体験してみて，人形を操る大変さと面白さを感じることができました。私たちのような若い世代がもっともっと伝統文化に触れていくことが大切だと思います。」「伝統文化について，言葉や文字で伝えることは大切だと思う。しかし，私は実際に見たり体験したりすることで後世に伝えていくことが最も大切だと思う。文楽を練習するうちに『楽しい』という気持ちが芽生えたが，この気持ちこそが文化を継承していく鍵だと思う。」という感想を述べている。

現在は2年生が学習を行っており，その成果は毎年の中学校の文化祭で披露されている（写真16）。

写真16　文化祭での公演と総合的な学習の時間での授業

6　愛媛県南予地方の文楽と学校教育

地域に伝承される文楽と学校教育について，その発祥と連携を中心に述べてきたが，地域の文楽と学校の双方の視点から，その発祥と継承，学校教育との関わりについて，次のように指摘できよう。

(1) 愛媛県南予地方の文楽の発祥と継承

南予地方で継承されている大谷文楽，鬼北文楽，朝日文楽，俵津文楽の4つの座に，その発祥と継承の特徴には次の3点が挙げられる。

第1は背景である。当時，四国の辺境の地にあって文楽は貴重な娯楽として親しまれていたという背景があったという点である。

愛媛に残る4つの文楽は，発祥の時期は1852年から1935年まで幅広いが，四国の辺境の地にあって文楽の巡業も含め数少ない貴重な娯楽として文楽が親しまれていたという背景があり，それ故に，蔵に眠っていた人形や他地域の座を大金で購入するなどして，各座が大きく発展した。

第2は個人の働きである。昭和30年代から40年代にかけて，テレビなどの娯楽の普及により4つのどの座も継承が危ぶまれた時期もあったが，その継承には，地域の連携と共に地元の校長や公民館主事などの個人の働きがあり，消滅の危機を迎えながらも再び活性化している。

第3は，継承に果たす学校の働きである。大谷文楽と大谷小学校の関係は，学校が閉校になることにより，その継承は大きな危機を迎えることを示している。地域の文楽保存会にとって，学校への指導は会の活動をも活性化させるという側面がある。このことは，泉小学校と連携して取り組む鬼北文楽も同様であろう。今後，地域のアイデンティティーともいえる伝統芸能の継承には，学校との連携は欠かすことはできない。

(2) 南予地方の文楽と学校教育の連携と影響

愛媛県南予地方に継承されてきた文楽と学校教育との関わりについて，学校教育の視点から次の4点が指摘できる。

第1は，地域に伝承される文楽は，学校週5日制の実施や総合的な学習の時間の導入など，時代の要請にあわせて学校教育に取り込まれてきたという点である。学校週5日制の導入に当たっては，社会教育が主体となり学校教育が協力する形であり，総合的な学習の時間の導入に当たっては，学校の要請によって地域の文楽会が指導に協力する形となった。ただし，大谷小学校や三瓶高校の例からも分かるように，校長のリーダーシップに基づく導入も重要な点である。

第2は，地域と連携した伝統文化継承の取組は，学校と地域双方を活性化させるという点である。大谷文楽と大谷小学校，鬼北文楽と泉小学校の事例は，地域と学校が一体とな

っていることを示している。

第3は，社会教育，学校教育，地域の三者が一体となり継承と育成に取り組むことで継承のサイクルができるという点である。西予市三瓶町の朝日文楽のケースでは，こども朝日文楽クラブの活動開始から20年経って初めて後継者が育ち継承の可能性が示された。文楽体験を目的とした活動は経験へと深化し，その経験は伝統芸能の垣根を低くし，社会人となったときの取組を容易にする。

第4は，学校の統廃合が進展した地域において，また，そうでなくとも，新しい学校の経営の核として地域の伝承芸能を取り込むとき，今後は総合的な学習の時間が鍵となるという点である。明浜中学校の場合，学校統合が文楽の学習の契機となったが，教育課程への位置付けが総合的な学習の時間において為されていた。このことは，クラブ活動や社会教育で取り組んできた文楽の体験活動は異なり，学校の教育目標と総合的な学習の時間のねらいに基づいたカリキュラム編成が求められることを意味している。つまり，体験自体を目的とするのではなく，伝統文化の体験学習を通して何を学んだのか，学ばせるのかという目標と対応する評価規準，指導方法が必要となってくる。明浜中学校の事例が示すように，現在，総合的な学習の時間に位置付けたとき，生徒の感想が示すように体験から学ぶ地域文化と伝統の継承が目標となる。

おわりに

愛媛の南予地方の伝承文化と学校教育の関わりについて述べてきた。山間や海辺の地にあって人々に親しまれてきた南予地方の文楽は，学校の統廃合と後継者不足により限界が見えてきている地域と，地域と学校，社会会教育が連携した継承のサイクルが確立し長年の取り組みが結実している地域，統合後に新たな継承の取り組みを始めている地域と，それぞれの連携の段階を見ることができる。

しかし，過疎化と少子高齢化はどの地域においても著しく進展している。だからこそ，地域らしさがこれから一層求められている。

グローバル化が否応なしに身近にある社会である。しかし，その社会に育つ子供たちを支える基盤は，実はローカルな地域らしさなのであり，古里への思いや誇りを育み支える地域の文化ではないだろうか。長年にわたって継承されてきた伝統文化は，地域のアイデンティティーである。学校と地域が連携し，地域らしさを共有し次代を担う子供たちを育成する理念としての「和文化教育」がこれからさらに重要になってくる。

【参考文献】

淡路人形協会（2014）・「史料で見る淡路人形浄瑠璃」・日本・公益財団法人淡路人形協会
朝日文楽保存会（2004）・「朝日文楽沿革史」・日

本・朝日文楽沿革史編集委員会
愛媛県教育委員会文化振興局（1983）・「愛媛県の民俗芸能」・日本・愛媛県教育委員会文化振興局
愛媛県歴史文化博物館（2009）・「歌舞伎と文楽の世界–愛媛の伝統芸能–」・日本・愛媛県歴史文化博物館
大谷小学校統廃合準備委員会・大谷小学校（2014）・「閉校閉園記念誌おおたに」・日本・大谷小学校統廃合準備委員会・大谷小学校
梶田叡一・中村哲編著（2009）・「学校を活性化する伝統・文化の教育」・日本・学事出版
久保高一（1987）・「俵津文楽沿革史」・日本・明浜町教育委員会
篠川一雄（2003）・「伝統芸能　俵津文楽すがはら座」・日本・俵津文楽すがはら座
肱川町誌編纂会（2003）・「新編肱川町誌」・日本・肱川町誌編纂会
広見町教育委員会（1986）・「鬼北文楽復活への序章　人形頭修理にいたる経過」・日本・広見町教育委員会
和文化教育学会 http://30.pro.tok2.com/~wabun-ka/kyoukai_01.html